

第二章 “仏の子”

第一節 仏の子、舍利弗

「方便品」につづく「譬喩品」は、舍利弗が踊躍歡喜して述べる言葉から始まる。それは、前章「方便品」で仏から誰ひとり、仏の教えを聞いて成仏しない者はいない」ということを聞かされたからである。舍利弗は喜びの中で次のように言う。

世尊よ、私は今、世尊の息子、嫡出の長男として、（仏の）口より生れた者、法より生れた者、法の化身、法の相続者、法より現れ出た者です。

adyāhan bhagavan bhagavataḥ putro jyeṣṭha auraso mukhato jāto dharmo dharmajō dharmā-nirmito dharmā-dāyādo dharmā-nirvṛtāḥ

(WT 60.2, KN 61.2……auraso sukhato jāto……, 今日乃知、眞是佛子、從佛口生、從法化生、得佛法分。大九、一〇、P 28 b 7, N 61.1)

かくして、この章は「仏の子」としての自覚を得た舍利弗に、釈尊が仏に成ることを教え予言する、いわゆる「授記」に進んでいく。

「授記」については後に第五節で改めて検討したい。授記は「法師品」でのいわゆる総授記に至って『法華経』の主張が明確になるのであるが、まず声聞、舍利弗に授記されるという構成に、この経の巧みさを見ることができると言えよう。

ここに引用した「仏の子」としての舍利弗の自覚は、彼の心境を述べる結論として語られる。

その前段には、「方便品」の説示に触れる以前に、先立つ仏の教えを鵜呑みにして修行し思いめぐらしたとある。この部分は漢訳も主意は等しい。その教えが何かは積極的に述べられてはいないが、声聞舍利弗の言としてこれを読まされる読者は、直接的には声聞乗を、しかし同時に法華以前の仏教理解全体を想起させられるであろう。

次には、漢訳にはないが、舍利弗の自覚として、「涅槃に到達」(adyāsmi bhagavan nirvāṇa-prāptāḥ)、『般涅槃經』(adyāsmi bhagavan parinirvṛtāḥ)、『阿羅漢果を得た』(adya me bhagavan arhatvan prāptam, KN 61. 1, P 28 b 6, N 61.1)との発言があって、「仏の子」としての発言について。

阿羅漢果は無学であり、小乗における弟子の達し得る究極である。しかし、経は当然のことながら、anuttara-samyak-sambodhi とは言っていない。その阿羅漢に達した自覚を述べた上で、舍利弗は「仏の子」としての自覚に

言及する。その舍利弗に授記されるという経の展開である。

経の説示は後に、「仏の子」も授記の対象も共に「一切衆生」であると展開を見る。ところで、「仏の子」や授記の発想を提示するこの段階では、『法華経』は舍利弗に仮託して、声聞乗に対しての優越性と、それまでの先行大乘経典に見られる小乗(声聞乗)に対立する大乘という方を止揚する姿勢とを打ち出していると言えるであろう。⁽¹⁾

さて、この「仏の子」という発想は、『法華経』前半において重要な役割を担い、『法華経』の説き方の個性を明確に示すものの一つであると考ええる。それは、読む者の感性に訴えて、宗教実践に駆り立てる説得力を持つものである。このような手法は、『法華経』全体に流れている特徴であるが、中でも「仏の子」という発想は際立っている。人々と仏との関係を「子供と大人」の関係、「子と親」の関係という、人間の普遍的な関係に譬えることによって、読む者に成仏道への保証を感性から感じとらせるといえるものである。その意味で、「仏の子」という発想は、宗教実践に対する当事者意識を造成する点で重要な役割を果たしていると思うのである。そこで、本章では、「仏の子」について検討する。

「仏の子」という表現は、sugatasya putra, sugatasya aurasa, loka-nāthāna aurasa, jin'ātmaja, buddha-suta 等、異なった形があり一定しない。⁽²⁾しかし、いずれの場合も「仏の子」という共通の概念を形を変えて言い現しているところを見ることができる。「仏の子」は思想であり、後述 dharmā-bhāṅka のように人間の現実的狀態を呼ぶ言葉ではなかったために、一定の言葉に定着しなかったものであろう。

「仏の子」という表現は、すでに「序品」から登場する。「序品」では、まず釈尊の眉間白毫相から放たれた光に照らし出される東方世界の中で菩薩の修行をしている者の呼称として、偈の中に現れる。(Vv. 11; 24; 27; 29; 31; 33; 42; 44; 47; 51; sugatasya putra; jinēndra-putra; jināsya putra; jin'ātmaja, KN 10. 5~15. 12, 「佛子」など vs 24 梵語が、

vs 29 は菩薩と意識。大九・三十三中。P 6a1~8a5, N 10.5~15.13)

また、文殊師利菩薩の語る、過去の日月灯明仏の仏土の描写中にも、偈では第六十九偈で戒を守り修行する *putrā nara-nāyakaṇaṇi* (KN 24.12, P 12b5, N 24.12) が、また第七十一偈では無上菩提に達した *sugatasya aurasaḥ(h)* (KN 24.16, P 12b7, N 24.16) が説かれてゐる。羅什(大九・四下)は前者を「諸比丘」、後者を「諸菩薩」と意識したと思われる。これらはすべて、菩薩の修行を他土で実践する者を「仏の子」と呼んでゐるものである。

また、「序品」では妙光法師に「つごも第七十四偈で(仏の) *putra* (KN 25.4, 妙法華は訳さず。大九・五上。P 13a2, N 25.4) 第七十七偈で *jin'ātmaja* (KN 25.10, 法師。大九・五下。P 13a5, N 25.10) 第九十偈で *sugat'ātmaja* (KN 27.6, 法師。大九・五中。P 13b7, N 27.6) と呼ぶ例がある。

「方便品」では、舍利弗が仏に説法をさう偈で、会衆を *putra jinasya aurasaḥ(h)* (vs 30, KN 35.10, 佛口所生子。大九・六下。P 17a6, N 35.10) と、また舍利弗自身を *jyeṣṭha-putra* (vs 35, KN 38.2, 佛長子。大九・六下。P 18a4, N 38.2) と呼んでゐる。

また、最後の偈群の中で、『法華経』の立場に志向する者たちを「仏の子」と呼んでゐる。(vs 50, *buddha-putra*, KN 46.3, 佛子。大九・八上。P 22b8, N 46.3; vs 68, *buddha-putra*, KN 48.12, 佛子。大九・八中。P 23b7, N 48.12; vs 128, *putra dvi-paddāramāṇaṇi*, KN 57.1, 佛子。大九・一〇下。P 27a3, N 57.1; vs 132, *sugat'ātmaja*, KN 57.10, 菩薩。大九・一〇下。P 27a7, N 57.10; vs 133, *buddha-putra* KN 57.11, 羅漢。大九・一〇下。P 27a7, N 57.11)

以上のように「序品」「方便品」では、菩薩の中でも、この経の担い手あるいは現実的に担い手になり得る人々を、それ以外の人々と区別して「仏の子」と呼んでゐる傾向が見られる。

さて、「仏の子」という表現は、以上の如く「序品」から登場するが、その意味するところを知る上で、「譬喩品」

の舍利弗の発言が重要である。つまり、「方便品」からの流れで「無一不成仏」の説法に触れ、これを受け入れる者が「仏の子」である⁽⁶⁾、経を読む者は理解するであろう。

ところで、『法華経』は羅睺羅が釈尊の太子の時の肉親の子であることにも触れてゐるのである。しかし、「仏の子」の発想と羅睺羅とは経では別に扱われている。つまり、「仏の子」は肉親の子を意味するのではない。さらに、「仏の口より生じ」等の表現が仏教の伝統にそった、定型的なものであることも先学により指摘されているところである⁽⁵⁾。

つまり、『法華経』は仏弟子に対する一般的な表現の形式を利用して、「仏の子」の発想を提示しているのである。しかし、『法華経』を読む者が受け取る「仏の子」という発想は、その域に留まらない。『法華経』は独自の手法によって、これを展開するからである。すなわち、「譬喩品」で説く「三界火宅の譬喩」、次の「信解品」の「長者窮子の譬喩」を通して、「仏の子」ということを読む者に深く感じとらせ、それによって読む者の心に当事者意識を宿らせてしまふのである。以下、それぞれについて検討する。

(1) 平川彰博士は「開三頭一の背景とその形成」(中村瑞隆編『法華経の思想と基盤』)で、

「声聞乘をも救い得る教理は、法華経以外の大乗経典には明確には示されていない」と論じられる。

(2) 『法華経』の担い手の呼び名の諸様相については、拙稿「法華経興期の担い手——そのサンスクリット呼称と羅什訳語——」(坂本幸男編『法華経の中国的展開』)で概観した。

(3) 本章第二節で論ずるように、「仏の子」の発想は一切衆生に拔げられる。

ところで、上田本昌博士は「法華経に現われた仏子について」(印仏研、第十卷第二号、昭和三十七年)で、「見宝塔品に「能く来世に於て、此の経を讀み持つは、是れ眞に佛の子にして、淳善の地に住するなり」(大九・三四中)と説かれることをあげ、一切衆生悉は仏子の立場をとりながら、受持即仏子が『法華経』の説く仏の子の「最も望ましいスタイル」であ

第二節 三界火宅の譬喩

「譬喩品」に説かれる「三界火宅の譬喩」は、「三界火宅」と現象世界の実体を譬喩で説き、また、その三界から衆生を救う方便の三車すなわち三乗と、大白牛車すなわち一仏乗との関わりを譬喩を通して説明する⁽¹⁾。しかし、角度を変えてこの譬喩を読むと、「仏の子」が浮かび上がってくる。

譬喩は次のように締めくくられている。

舍利弗よ、如来応供正遍知もまたそのようである。……またかれらすべてが実に自分の子供であると知っていて、ただ仏乗によってそれら衆生を完全に滅度せしめるのである。

……如来の完全な滅度によって、大般涅槃によって、それらすべての衆生を、完全に滅度せしめるのである。…

……evam eva Śāriputra taḥgāto 'py arhan samyak-sambuddho……sarve cāite mamāiva putrā iti jñātvā buddha-yānenāiva tēn sattvān parinirvāpayaṭi / ……

……sarvāṃs ca tēn sattvāṃs taḥgāta-parinirvāṇena mahā-parinirvāṇena parinirvāpayaṭi / …… (KN 81. 9; 13; 14)

(如来亦復如是、爲一切衆生之父、……是諸衆生、皆是我子、等與大乘、(不令有人、獨得滅度、)皆以如来滅度、而滅度之。大九、一三下。P 38 a 7, N 81. 9)

つまり、舍利弗や一部の仏弟子に限らず、一切衆生が「仏の子」であると、ここで明示される。

ところで、父と子になぞらえて仏と衆生の関係が説かれるということ自体、経を読む者の感性に訴える有効な手法であると言えるが、それ以上に、この譬喩全体の構成と内容に、そうした手法が駆使されていることに注目したい。

今、大きなその家には火が燃え盛っている。しかし、その中にいる子供たちは遊びに興じて、火の燃えるのも意に介さない。しかも、その家の内部の状況はと言うと、実に言語に絶するものがある。……

この記述は、長行では簡単であるが、偈の説き様は実に詳しく、独特の描写がなされていると言えるであろう。それは二十三偈にわたって述べられる。長文であるが、長文を費やすことに経の意図が窺われるので、ここで全文を引用する。

たとえば、ある人の老朽化して、大きいガタのきた家がある。高殿は壊れ、柱も根元が腐っている。 (39)

窓、涼房は一部が壊れ、壁やしきりの漆喰はちらばり、欄楯は老朽してはずれそうだし、草屋根はいたるところ落ちこんでいる。 (40)

五百以上の命あるものがそこには住んでいて、多くの小部屋があり、汚物が満ち見るも汚らしい。 (41)

そこではすべての梁が傾き、石壁や扉もまた崩れ落ちている。そこには幾拘胝もの鷲が、また鳩や梟、その他の鳥も棲む。 (42)

強い猛毒の恐ろしい毒蛇が、そこにはそここにおいて、様々な蠍とか鼠といったそんな最悪の生き物の棲処である。 (43)

そこにもここにも怪しげなものがいて、大小便で手のほどこしようもない。蛆、蟻、螢がうじゃうじゃおり、犬や野干が吠える。 (44)

そこには兇暴な狼がいて、人の死屍を貪り食っている。そいつらが出て行くのを待ちかまえて、犬や野干が群がり住む。(45)

それら力の弱いのは常に飢えており、あちこちで嚼みあい争いあいながら叫声をあげる。その家の物凄さはこんなふうなのだ。(46)

まさにルドラ神のように兇暴な夜叉たちも、人の死屍を引き裂きながら棲む。百足、毒蛇、猛獣が、そこにはあちこちに棲みついて、(47)

巢を作ってあちこちで仔を生み落とす。生み落としても生み落としても、それらをかの夜叉どもがあとからあとから食い尽くす。(48)

他の生きものを喰って腹いっぱいになったそのルドラ神のように兇暴な夜叉たちは、他の生きものの肉ではきれそうになつた体で、今度はそこで猛烈なケンカを始める。(49)

その崩れた部屋には、残酷でルドラ神のように兇暴な心のクンバーンダ鬼が棲みついており、小さいの位の大きい(一ヴァイタステイ、一ハスタ、二ハスタの)が匍いまわっている。(50)

そいつらはそこで、犬の足をつかまえて地べたで仰向けにし、頸を締めて脅し苦しめて楽しむ。(51)

また、裸で色黒の痩せて背の高い、大きな亡霊も棲みついており、飢えていて食物をあさりつつそこで悲嘆の声をあげる。(52)

あるいは針のような口、あるいは牛のような顔、人間の大きさのもの、また犬の大きさのもの。飢えに悩まされて髪ふりみだし声をあげる。(53)

またその時、それら夜叉亡霊ピシャーチャカといった飢えたものどもは、食物を求めてずっと窓や孔から四方を

窺っている。(54)

大きく高くそびえていても、たいそうガタがきて、老朽化し弱ってしまいみずばらしい。その、このように恐ろしい家が一人の人の持ち物であったとする。(55)

そして、その人は家の外にいたとする。そして、突然、周囲四方に幾千の焰が燃え上がり、その家に火がついたとする。(56)

火に熱せられた竹や木が、同じように燃え上がった柱や壁が、激しく非常に恐ろしい音をたて、夜叉や亡霊どもが叫声をあげる。(57)

幾百もの鷲は焰に焼かれ、クンバーンダ鬼どもは顔を焼かれて歩きまわり、そこらじゅうに幾百もの猛獣が焼かれながら吼え叫ぶ。(58)

不運な多くのピシャーチャカが、火に焼かれてそこをうろつき、焼かれながら互いに他のものを牙で切り裂き、血を流す。(59)

もう狼たちは死んでしまい、生きているものは互いに喰い合う。大便が焼けてイヤな臭いがあるその場の四方にただよう。(60)

百足が逃げだし、そいつらをクンバーンダ鬼どもが食い尽くす。髪が焼けてしまった亡霊が飢えと焦熱に苦しんでうろつきまわる。(61)

yathā hi puruṣasya bhaved agāraṁ jīraṇaṁ mahantaṁ ca sudurbalaṁ ca /

viśīrṇa prāsādu tathā bhaveta stambhāś ca mūleṣu bhaveyu pūṭikāḥ // 39 //

gavakṣa-harmyā gaditāika-deśā viśīrṇa kuḍyaṇṇa kafa lepanaṁ ca /

samanatato vyāda-sātās ca tatra nadanti krośanti ca dahyamānāḥ // 58 //
 piśacakās tatra bahū bhramanti saṃtāpitā agnina manda-puṇyāḥ /
 dantehi pāṭitva te anyam-anyam rudhiraṇa siṅcanti ca dahyamānāḥ // 59 //
 bhruṅḍakā kāla-gatās ca tatra khādanti satvās ca te anyam-anyam /
 uccāra dahyatya amanojña-gandhaḥ pravāyate loki catur-dīśāsu // 60 //
 śatā-padyo prapālāyamānāḥ kumbhāṅḍakās tāḥ paribhakṣayanti /
 pradīpta-keśās ca bhramanti pretāḥ kuśdhāya dāhena ca dahyamānāḥ // 61 //
 (WT 76. 26~80. 12, KN 82. 12~86. 2)

(39)譬如長者 有一大宅 其宅久故 而復頓弊 堂舍高危 柱根摧朽 (40+42前)梁棟傾斜 其陛頽毀 牆壁圯圻 泥塗穢落 覆苦亂墜 椽桷差脫 周障屈曲 (41)雜穢充通 有五百人 止住其中 (42後)鴉鵲鷓鴣 烏鴉鳩鴿 (43)蜈蚣蝮蠍 蜈蚣蚰蜒 守宮百足 鼯狸鼯鼠 諸惡蟲輩 交橫馳走 (44)屎尿臭處 不淨流溢 蟻蝨諸蟲 而集其上 狐狼野干 (45)咀嚼踐蹋 齧齧死屍 骨肉狼藉 由是群狗 競來(46)搏撮 飢羸惻惶 處處求食 鬪爭據掣 噬吐嗥吠 其舍恐怖 變狀如是 (47)處處皆有 魑魅魍魎 夜叉惡鬼 食噉人肉 毒蟲之屬 諸惡禽獸 (48)孕乳產生 各自藏護 夜叉競來 爭取食之 (49)食之既飽 惡心轉熾 鬪爭之聲 甚可怖畏 (50)鳩槃荼鬼 蹲踞土埵 或時離地 一尺二尺 往返遊行 (51)縱逸嬉戲 捉狗兩足 撲令失聲 以脚加頸 怖狗自樂 (52)復有諸鬼 其身長大 裸形黑瘦 常住其中 發大惡聲 叫呼求食 (53)復有諸鬼 其咽如針 復有諸鬼 首如牛頭 或食人肉 或復噉狗 頭髮蓬亂 殘害兇險 飢渴所逼 叫喚馳走 (54)夜叉餓鬼 諸惡鳥獸 飢急四向 窺看窓牖 (55)如是諸難 恐畏無量 是朽故宅 屬于一人 (56)其人近出 未久之間 於後宅舍 忽然火起 四面一時 其炎俱熾 (57)棟梁椽柱 爆聲震裂 摧折墮落 牆壁崩倒 諸鬼神等 揚聲大叫 (58)鸛鷺諸鳥 鳩槃荼等 周章惶怖 不能自出 惡獸毒蟲 藏竄孔穴 (59)毘舍闍鬼 亦住其中 薄福德故 爲火所逼 共相殘害 飲血噉肉 (60)野干之屬 竝已前死 諸大惡獸 競來食噉 臭烟燻煇 四面充塞 (61)蜈蚣蚰蜒 毒蛇之類 爲火所燒 爭走出穴 鳩槃荼鬼 隨取而食 又

諸餓鬼 頭上火燃 飢渴熱惱 周章悶走。(大九、一三下、一四上中。P.39a3~40a6, N.82.12~86.2)

以上、いわゆる魑魅魍魎の横行する様を、縷々、延々と述べて余すところがない。読む者の心を嫌悪感で満たさずにはおかないものであると言えよう。

しかも、読む者が文意を理解するといった形ではなく、感覚的に、いわばうんざりさせられたところで、経は火宅に遊ぶ子供たちを評して、

幼稚で無知だからこそ、彼らは遊びに酔って楽しんでるのだ。

ramanti te kṛīḍanaka-pramatā yathā 'pi bālā avijānamānāḥ // 63 // (KN 86. 6)

(稚小無知 歡娛樂著 大九、一四中。P.40a7, N.86. 6)

と言っているのである。

譬喩は現象世界の実体をこの火宅に喩えているわけであるが、ここでより重要なことは、子供に託して衆生のあり方を示唆しているという点である。そして、経を読む者は、自分もその一人である「衆生」について、二つのことを認識せざるを得ない。すなわち、第一は「衆生」は「子供ゆえに」本当のことがわからない状態であるということである。第二は「大人になっていない」子供である衆生と、既に「大人になった」状態である「仏」という認識である。

(1) 三界火宅の譬喩は、古来、『法華経』の一乗の立場を示すものとして注目されてきた。特に中国で、大白牛車を三車中の牛車とは異なるものと考える「四車家」と、同じと見る「三車家」の説が対立した。横超『法華経序説』四三頁、紀野『法華経の探求』一五七頁以降。この点に触れる最近の論文としては、

中村瑞隆「一乗思想解釈の展開」(望月敏厚編『近代日本の法華仏教』)

丸山孝雄「法華七喻解釈の展開」(中村瑞隆編『法華経の思想と基盤』)がある。